

令和の大学生と読む昭和のマンガ(1)

An Attempt to Read Showa Era Manga with Students in the Reiwa Period(1)

村 松 純 光

はじめに

現代コミュニケーション学科に置かれた専門教育科目の中に「基本科目」と呼ばれる2単位モノが三つあり、学生はうち二つ（計4単位）の修得が卒業に必須と定められている。私は今年度この中の一つ「現代コミュニケーション論」を春・秋学期とも担当させてもらっているが、かような事情から受講者は年間80名程を数えた。小所帯の科でこれはかなり多い部類だと思う。今年度赴任したばかりの私には、学科の名称がまるまる冠され卒業要件にも絡んだこの科目を担うプレッシャーは相応にあったが、むしろいい顔見せの場をいただけたという喜びの方が勝り、毎時楽しく授業に臨むことができた。高校での教員生活が長かった私にとって90分という講義時間はこれまで慣れ親しんだ尺のおよそ2倍であって、当初は持て余す不安があったが、杞憂であった。時間を忘れて授業にのめり込み、気付けば廊下に次の時限の学生たちの姿が、ということがよくあった。

ただ、内容の適正や充実度を問われたら判らない。いずれ学生からの授業評価（講義最終回に大学ポータルサイト上にてアンケート調査を実施）が手許に届くはずであるから、その結果は真摯に受け止める覚悟でいるが、その前に自己点検をおこなっておくのが筋のようである。そこで、毎授業の締めには学生に記入させていた反省用紙「ふりかえりシート」の当該教員版としての本稿執筆を思い立った。

今後長く受け持つことになりそうな科目である。一年目の今年の「ふりかえり」は欲張らず、授業の実際よりも構想段階にウェイトを置いて書きたい。まず「現代コミュニケーション論」とは何かという科目の「原点」に対する私の理解について（1、2章）、次に使用する教材の選び方と授業での配置について（3、4章）記しておこう。本稿の使命はそこまでとし、個々の教材の特徴や授業展開上の工夫、学生の反応等について書く長い実践報告は次年度に譲りたい。表題の最後を(1)としたのはその予告のつもりである。

第1章 「現代コミュニケーション論」とは何か

(1)科目名の意味を問う

「現代コミュニケーション論」という科目の名称を、学生たちはどのように理解して講義に臨んでいるのであろうか。第1回講義の冒頭で全受講生に尋ねてみたところ（こういう場面では、隣りあった者同士で互いに答を言い合うのが私の授業の決まりである）、「現代のコミュニケーションに

ついて論じる授業」といったミニマムな答がほうぼうの席から聞こえてきた。そこで私は「諸君が言う『現代』って具体的にはいつからいつまで？」「『コミュニケーション』ってよく聞くけれど、たとえば誰と誰の？」「『～論』って大学の科目によくあるけれど、これが付く科目と付かない科目の違いは？」等と畳みかけてみる。「いちど単語レベルに分解して丁寧に考えてみてごらん」という提案である。

(2) カッコを付けて考えてみる

かつて柄谷行人が『日本近代文学の起源』（※1）の「あとがき」で次のように書いていた。「本書につけ加えるべきことはとくにないが、“ありうべき誤解をさけるために一言” っておきたい。それは、『日本近代文学の起源』というタイトルにおいて、実は、日本・近代・文学といった語、さらにとりわけ起源という語にカッコが附されねばならないということである。」これを私は平成の初めに講談社文芸文庫版（※2）で読んだ。柄谷のこの“一言”を受けて装丁家が洒落てみせたのかどうか、この版の表紙カバーでは日本、近代、文学、起源の四語が（カッコこそ附されていないが）不自然に改行されて縦四列に置かれている。現在流通している同文庫の新版（※3）カバーでは自然な一行表記に変更されているうえ「原本」と付記されており、前年に出た岩波現代文庫版「定本」（※4）と区別する必要があるの改訂だと思うが、私にとって『日本近代文学の起源』と言ったら今も昭和最後の年に出た文芸文庫版のあの表紙、ばらされて別個に置かれたあの四語のイメージなのである。

「現代コミュニケーション論」というオーソドックスな科目名をぶつ切りにし、カッコを附したり改行してみたくなったのは、日頃から柄谷の“一言”を勝手に一般化して便利に使わせてもらっているからであり、これは長年こじらせている私の悪癖である。高校の国語科教員であった頃は科目「現代文」で同じことをして（「現代」「文」）生徒を困らせていたのだが、当時のこの発問は今にして思えば重要な伏線であった。高校「現代文」と大学「現代コミュニケーション論」、それぞれの「現代」をカッコで括って浮き上がらせてみると、どうも二つは似て非なる形をしているではないか。手網ですくい取って君は何者かと尋ねてみれば、前者は「私はたしか明治維新以後でした、よね？」と自信なさげに、後者は「私はもちろん第二次大戦終結以後です！」と鼻息荒く答えるであろう。

(3) 多義語「現代」をどう捉えるか

令和4年度から高校では新しい学習指導要領（以下『要領』とする）の運用が始まり、科目「現代文」（厳密には「現代文A」「現代文B」の2科目）は旧課程で学ぶ生徒の卒業をもって姿を消す運命となった。だが、「現代の国語」という新設科目の中に「現代」の語は残った。文科省はこの新科目の性格について「実社会における国語による諸活動に必要な資質・能力の育成に主眼を置く」と説明している。（※5）とすれば、ここでの「現代」は、コミュニケーション力豊かな人材を求める企業の声を容れた本学「現代コミュニケーション論」における「現代」と親和性が高い

ように思われる。

では、消えゆく「現代文」の中にあった「現代」（旧現代とでも呼んだらいいのか）はもうその役目を終えたのか。長くこの所属であった小説群（とりわけ定番化率の高かった「近代」小説群）が、新設科目「言語文化」の方にごっそり移動したなら話は分かりやすかったのだが、なんとも不徹底な形で転籍となったことで、話がややこしくなっている。（後述）

ところで、旧『要領』で「現代」の語が冠された科目というと、「現代文」の他にもう一つ公民科「現代社会」がある。こちらはもともと「現代コミュニケーション論」の「現代」と近い内容であったと理解しているが、今度の改訂で「現代文」と同じ道をたどり、新設科目「公共」に取って代わられている。

こうしてみると、どうやら中等教育界限で「現代」は斜陽語で、用例も専ら「①現在の時代。今の世。当世。」（『広辞苑 第七版』）等の、辞書を引いて最初に現れる意に限定され始めているように思われる。歴史は単線ではないから国や地域で時代認識やその呼称に齟齬が生じることは当たり前だとしても、「現代」の語を自国の教育プログラム上にいつまでも「同音異義語」として残しておくのはいかがなものか、という判断か。こと高校国語科に関しては、「現代」とはもはや「現在」「今」のそれ以上でも以下でもなく、舞台もほぼ「実社会」に絞られたわけだから、前時代を引きずった教養主義的「現代文」はもう店じまいして、明治・大正氏にはここいらで隠居願おう。「言語文化」という終の棲家も用意したのだから文句あるまい。これで「現代」の語にまつわる長年の齟齬の問題もなくなっていくだろう、という思惑か。

だが、ことはそううまくは運ばなかったのである。某A社発行の「現代の国語」教科書に大正4年発表の芥川龍之介「羅生門」（ほか四つの小説作品）が残った。他社が軒並みこれを“予定通り”「言語文化」教科書に転籍させる中、教員からの強い要望を容れたというA社「現代の国語」は現場の高い支持を得て採択シェアで1位となった。共通必修科目でのシェア1位は出版社にとって今後の営業活動にも大きなアドバンテージである。他社にしてみればけっこうなルール違反（どの社も見えないルールと戦っていたのだが）をした選手がちゃっかり優勝をさらっていったようなものであるし、そもそも『要領』の主旨に沿っていない（と出版社は思っただろうし私も思った）教科書をなぜ文科省が検定で通したのか、という怒りも大きいであろう。

これでまた「現代」をどう定義するかの問題はグレーになった。「現代の国語」「言語文化」にまつわるドタバタ劇（いまま上演中である）については、やはり新設の「論理国語」「文学国語」で勃発した論争（※6）と同様すでに各方面から多くの発言がなされている（※7）が、いずれも「現代」という語をどう捉えるかという「現代観」の問題がそこに根差しているように私には思える。

(4)科目名から考える高・大の違い

前述したように「現代コミュニケーション論」の初回授業で私はこの一見シンプルな科目名を敢えてぶつ切りにして、「現代」って何？「コミュニケーション」って何？「～論」って何？との問

いを受講生にぶつけてみたのであった。全15回に渡る長い講義の最初だから下手に回答を急かす必要はない。受講生には1年生も多いことから、彼ら彼女らがついこの間まで学んでいた高校の科目が今の高校1年生からどのような名称・内容に変わったのかという話題から始めて、それらと大学の科目群との傾向の違い、「現代」「コミュニケーション」「論」それぞれの辞書的な意味と文脈に依る意味（意味合い）の違いについて話す程度に止めた。

私自身も彼ら彼女ら同様高校から転籍して来て間もない人間であり、ここで高・大のカリキュラムの違い（科目の名称を拾って比べたに過ぎないが）を意識できたことはよかった。次の(5)はこの場で学生に向けて話したことの要旨を講義の体で書いたものである。学生に向けて、とは言いながら、事実は自分自身に向けた用語解説であったことを認めたい。

(5)「現代」「コミュニケーション」「論」

「現代」の語はもともと適応能力が高く、ところ変われば守備範囲もプレーの質も変わるような懐の深い語で、それがかえって高校現場では面倒臭がられているようだが、大学ではそうでもないようである。それが証拠に、諸君はこの語を冠した学科に属し、この語を冠した選択必修科目をこうして受講しているではないか。ただ、意外にも本学科に「現代」の語を含んだ科目名は少なく、基礎教育科目に一つ、専門教育科目に二つを数えるのみである。（なお、高校での扱われ方については(3)に述べた通りを話した。長くなるのでここでは繰り返さない。）

「コミュニケーション」の語については、本学科のディプロマポリシーの4、5がこれの説明に使えようである。引用すると「4. 他者の思いや考えを受け止め、理解するとともに、自らの思いや考えも的確に表現、発信し、円滑なコミュニケーションを取って協働することができる。（ジェネリックスキル）」「5. 現代社会の市民として、多様な人々の存在、様々な文化、価値観の存在を理解し、建学の精神である愛と奉仕の実践に基づき、社会や他者のために主体的に行動し貢献できる。（市民性の涵養）」とある。4、5ともに「できる」というループリック型で結ばれているのは、これが容易には「できない」我々の現状を克服したいと願うからである。ではなぜ「できない」のか。本講義ではこのことについてゆっくり考えられるような教材を用意したい。「コミュニケーション」は近年「能力」と合わさって頻繁に用いられ（「コミュ力」とも略され）、学校で社会でこの語を聞かない日はない。それが大きなストレスであるという若者もさぞ多いことだろう。若者ではないが私もその一人である。諸君はどうであろうか。

ちなみに高校ではこれまで（旧『要領』（※8）の下では）各学科共通科目として「コミュニケーション英語基礎」、「コミュニケーション英語Ⅰ」「同Ⅱ」「同Ⅲ」（以上外国語科）があり、専門学科科目として福祉科に「コミュニケーション技術」があった。新しい『要領』下では各学科共通科目として「英語コミュニケーションⅠ」「同Ⅱ」「同Ⅲ」（以上外国語科）があり、専門学科科目として福祉科に「コミュニケーション技術」、そして商業科に新設の「ビジネス・コミュニケーション」が置かれた。意外にも高校の科目名にはそれほど多く採られていない印象である。大学はどうかと数えてみると「コミュニケーション」の語を含んだ科目名は、本学科に8個（基礎教育科目に

1、専門教育科目に7)置かれていた。これが多いのか少ないのかは分からない。

最後に「論」であるが、辞書ではこれを「①筋道を立てて述べること。意見。見解。」(『広辞苑 第七版』)と説明している。では「現代」「コミュニケーション」について筋道を立てて述べるのは「誰」か、意見や見解は「誰」のものか。私・村松であろうか。諸君ら学生であろうか。誰か偉いこの道の大家であろうか。あるいは「論」はまだ未完成で、授業を通じて皆で作りに上げていくというのがこの科目の主旨なのであるか。

高校で「～論」にあたる科目と言え、これまで専門学科にそれぞれ「理数数学特論」(理数科)、「スポーツ概論」(体育科)、「音楽理論」(音楽科)、「美術概論」(美術科)、「電気理論」(水産科)が置かれており、新『要領』でも変更はない。が、各学科共通科目として新たに「論理国語」(国語)、「論理・表現Ⅰ」「Ⅱ」「Ⅲ」(外国語)の四つが設置された。これらは「論理」であって「～論」とは違うが、筋道だった意見を言う「論」の字が国・英2教科で揃ってフィーチャされた点に諸君はどのような思惑(さて誰の?)を感じるだろうか。参考までにまた大学の方を見てみると、「～論」という科目は、本学科に19個(基礎教育科目に4、専門教育科目に15)置かれていた。大学には他に「～学」「～法」「～入門」「～演習」といった語が付く科目や、そのいずれも付かない科目があるが、「～演習」は割合分かりやすい例としても、その他の違いについては考えてみたことがあるだろうか。

第2章 「現代コミュニケーション論」で何を学ぶか

(1)ばらした単語を再接合する

「現代コミュニケーション論」という科目名を単語で切り分けハカリに載せてみたら、一番重い部位は(意外にも)「現代」であった。前の章で言いたかったのは結局それだけのことだったが、切ってばらした単語をもう一度接合して「現代コミュニケーション論」に戻さないことには授業を始めることができない。そこで接着剤(乾くと透明になるタイプ)となる繋ぎの言葉が必要となる。

まず「現代」と「コミュニケーション」を「の」で繋いで「現代のコミュニケーション」として見たが、これでは学生の生ぬるい返答と同じである。そこで「現代社会におけるコミュニケーション」として見たら少し具体的にイメージできるようになった。こうやって漢文の訓読法のように送り仮名の部分(繋ぎの言葉)をいろいろに補って行くことで、「現代コミュニケーション論」という科目の方向性が絞られていく。先の例で言えばここに「社会における」という繋ぎが入ることで、「現代」が「現代社会」を含意した語(時間と場所を同時に表した語)であったことが意識され、では「現代社会」とは?という次の問いが生まれてくる。そして、これはひょっと高校「現代の国語」で説明されていた「実社会」(※9)のことなのでは、という予感がしてきたのである。

「実社会」とは何だろうか。新『要領』では次のように説明されている。「実社会とは、私たちが生きる現実の社会そのものである。」さらにこう続く。「実社会に必要な国語の知識や技能を身に

付けるとは、学校生活や身近な社会生活における様々な関わりを含みながらも、社会人として活躍していく高校生が、他者と関わる現実の社会において必要な国語の知識や技能について理解し、それを適切に使うことができるようにすることを示している。」(※10)「国語」を「コミュニケーション」に、「高校生」を「短大生」に読み替えれば、これはもう「現代コミュニケーション論」の説明のように思えるのである。

(2)「現代」「コミュニケーション」「論」から「現代コミュニケーション論」へ

そろそろ具体的な授業構想に入るべく、「現代」「コミュニケーション」「論」の三語を接合して「現代社会におけるコミュニケーションの諸問題について皆で議論する授業」としてみた。繋ぎの言葉は他にもあり得るだろうし、そうすれば、これとは全く違うアプローチの授業も構想し得るだろうが、毎時読み切り型の教材を用意し、様々なテーマで議論をすることが可能なこれに落ち着いた。

「現代」と「コミュニケーション」の間に「社会における」を置いた経緯は前述した通りである。最後の「論」を「議論する授業」としたのは語呂的にもいささか苦しいところだが、世にある「コミュニケーション論」のいくつかを一方向的に講じて終わり、という授業ではなく、我々が「他者と関わる現実の社会」で体験したり見聞きたりする出来事（主にディスコミュニケーションの事例）について、受講生と共に考える授業にしていきたいという思いをこう表現したものである。問題は学生たちの意見の拾い方で、マイクで発言させたものをリアルタイムで共有したり、文章化させたものを回収して次の回で紹介するなど、自分たちの意見が授業の成立に大きく関わっているという自覚を学生たちが持てるよう工夫しなければならない。

(3)主たる教材は「現代マンガ」

次は教材についてである。その日話題とする「現代社会におけるコミュニケーションの諸問題」の事例は、短時間での情報共有がしやすい短編マンガ、絵本、超短編小説（ショートショート）などから引いてくることとした。教育の場でマンガを使用することについては様々な意見があるだろうが、私自身は20年来これを高校国語の授業内で活用してきた。ただ、その扱いは教科書本文という主教材に対する補助的資料の域を出ないものだった。一方で教材としてのマンガの有効性については学術研究が着実に進んでおり（※11）、これに寄与したい思いがかねて私にも強く、教科書の縛りのない大学に移って来たこの機会に、と考えた。

ちなみに、ここで私が言う「マンガ」とはいわゆる「現代マンガ」のことである。かつて呉智英が『現代マンガの全体像』（※12）の中でマンガにおける「現代」の始まりを太平洋戦争後の復興期とし、明治から昭和初期までをその「前史」に位置付けたが、この区分は本稿第1章で私が「現代コミュニケーション論」における「現代」として確認したものと符合する。「現代コミュニケーション論」の授業にこの国の戦後の発展（そして停滞）と共にあった「現代マンガ」を活用するのは、むしろ非常にオーソドックスな手段と言えるのかもしれない。ここは堂々とマンガの教材化に

取り組んでみよう。マンガを主教材に据えた授業を構想してみよう。そう考えた。

(4)異世代間をつなぐ昭和のメディア

昭和生まれで平成の初めに大学生であった私も、平成生まれで令和の初めに大学生となった受講生も同じ「現代」人であり、共にその精神のいくらかは戦後巨大化したメディア「マンガ」によって育まれた可能性がある。とすると、世代の異なる私たちもこの共通体験によってすでに繋がっていて、これの活用いかんでもっと深く繋がることのできるのではないか。本稿の表題を「令和の大学生と読む昭和のマンガ」といくらか情緒的にしたのは、体験の共有によって異世代が互いへの理解を深めていくという「マンガ」的展開こそ、私自身がこの授業に期待するものだからである。

異世代間ディスコミュニケーションに起因するとおぼしき悲しい出来事が多い中、マンガなどのサブカルチャーを含む「昭和レトロ文化」が10～20代の若者に人気とのニュースも最近よく耳にするようになった。昭和世代には自らの青春を後輩たちに肯定されたようでくすぐったくも嬉しい話だが、これをもって若者が老いゆく昭和世代をリスペクトし、共に「今」を生きようとしてくれているのだとするのは都合のいい解釈だろう。同様に、私が令和の学生に未知の昭和マンガを読ませ、何らかの感想を引き出せたとして、それが世代間ギャップを埋め得る何かである保証はない。しかし、同じテキストを一緒に読んで議論を交わした「今」は紛れもない現実であり、ここでの体験がいずれ双方に有効な「経験」に化けるのでは、というファンタジーぐらい思い描いても罰は当たらないと思うのである。SNSで忙しい令和の大学生に、週に1回、90分ほどの時間だけでもゆっくり「昭和のマンガ」世界に浸かっていただく。これからしてもう結構なファンタジーではないか。

第3章 令和の大学生と読む昭和のマンガ

(1)教材選定についての考え方

「現代コミュニケーション論」ではマンガに限らずサブカルチャー全般から教材を採り、絵本、小説、評論、ネット記事、時にフォークソングの歌詞なども議論の俎上に載せた。本稿ではその中からマンガを取りあげた回、特に学生には馴染みの薄い「昭和のマンガ」を教材に採った回に絞った報告をおこないたい。なお、「現代マンガ」としての取り扱いであるから、「昭和のマンガ」と言ってもここでは1945年以降に描かれたものをそう呼ぶことを断っておく。

テキストの選定にあたっては、既に教材としての教育的価値を認められている作品から、教場での使用は初めてかもしれない「チャレンジ」作品までを対象とし、できるだけ現物を学生の前に示したい気持ちから、私の蔵書の中から見繕うことを原則とした。コマ割り、画風、ペンのタッチ、吹き出しの台詞、そこに描かれた習俗等、いかにも時代がかったもののほうが若者は興味を持って読むことを高校での授業実践を通じて知っていたから、昭和でもなるべく平成に近い頃の作品を、といった付度はいらない。呉智英が前述の著の中で整理・提案していた全六期からなる「現代マンガ」の時代区分(※13)の一期から二期(昭和20～40年)までは私自身に原体験がなくマンガの現

物も手元になかったことから使用に至らなかったが、昭和41年を端緒とする三期から以降は最後の六期までをもれなくカバーした教材選定ができた。とは言え三期、四期（昭和41～53年）にやや偏りがちとなったのは、私自身が大学生だった頃、この時代の作品から大きなインパクトを受け、その後の人生が多少なりと変わってしまった経験が反映したものだろう。

(2)授業の実際

授業は毎回、前時に皆で読んだ作品の内容を思い出すところから始める。そして学生から提出された「ふりかえりシート」の紹介にも一定の時間を割く。そこからようやく今日の話題に入っていくのだが、毎回のテーマは前時のそれと何らかの点で繋がっているように教材を配置してあるため、両者の共通点を見つけさせる「ふりかえり」をここでも適宜おこなう。体験を経験とするためには、こうして何度も繰り返してふりかえる仕掛けが授業には必要と考えるからである。

テキストの共有は画像をスクリーンに映写する形でおこない、紙媒体で配布することはしない。テキストを指定して次回までに読んでくるよう言ったり、手元で各々眺めるよう指示することは簡単であるが、それでは皆で同一のものを読んでいるというライブ感が希薄となり、共通体験と言うには弱い。テキストをしっかりと読むことはこの後の議論の大前提であるわけだから、ここは徹底して読む環境を作りたい。学生たちがくいいるように画面を見つめる風景は実際悪くないものである。また、「ふりかえりシート」に、マンガの読み方がこれまで分からなくて（コマを読み進める順番がわからなかったということのようである）ずっと敬遠してきたけれど、今回ようやく読めてうれしい、といった旨のコメントを書いてきた学生がいた。多くの人にとってコマを拾う順番はどこかで教わったものではなく自然と身についたものであろうが、そうでない人も当然いるのだ。コマ割りが複雑な今どきのマンガは読めなくても、コマが整然と並んでいる傾向の昭和マンガなら読める、という人もきっといるだろう。改めてこういうことに気付けたことは私にも有意義であった。

(3)使用テキスト

全15回の講義中「昭和のマンガ」をテキストに採ったのは、およそ半分の7回である。1回の授業でマンガ2編を読むこともあったため、取りあげた作品の数は全部で9編となった。下の①～⑨はそれを使用順に並べたものである。一段目が作者名と作品名、二段目が初出誌と発表年月、三段目が読後に設定した「コミュニケーション」に関する議論のテーマである。

①藤子・F・不二雄※『ミノタウロスの皿』 ※初出時の筆名は藤子不二雄

『ビッグコミック』（小学館、1969〈昭和44〉年10月10日号）

「言葉は通じるのに話が通じない」恐ろしさを体験したことってある？

②あすなひろし『青い空を、白い雲がかけてった』より「いつか見た遠い空」

『週刊少年チャンピオン』（秋田書店、1977〈昭和52〉年2月7日号）

他人を「羨む（心病む）」、他人が「羨ましい（心病ましい）」ってどんな感情？

③手塚治虫『ブラックジャック』より「ハッスルピノコ」

『週刊少年チャンピオン』（秋田書店、1976〈昭和51〉年3月29日号）

人はどうして学校に行くの？「学びたい」と「学校に行きたい」はイコールなの？

④諸星大二郎『無面目』

『月刊コミックトム』（潮出版社、1988〈昭和63〉年9月号、1989〈平成1〉年3月号）

よかれと思って人にした行為が、かえってその人を苦しめてしまった時、どうする？

⑤藤子不二雄④※『明日は日曜日そしてまた明後日も…』 ※初出時の筆名は藤子不二雄

『COM』（虫プロ商事、1971〈昭和46〉年4月号）

親子は何を誤ったの？ どうすれば悲劇を回避できたの？

⑥永島慎二『仮面』

『月刊漫画ガロ』（青林堂、1967〈昭和42〉年5月号）

仮面をつけた自分は本当の自分とは言えないの？ あなたも仮面をつけている？

⑦つげ義春『チーコ』

『月刊漫画ガロ』（青林堂、1966〈昭和41〉年3月号）

動物による癒し、動物を介した他者とのコミュニケーションで思い当たることってある？

⑧高野文子『田辺のつる』

『漫金超』（チャンネルゼロ、1980〈昭和55〉年4月創刊号）

異世代（とくに高齢者）とのコミュニケーションで気をつけていることってある？

⑨辰巳ヨシヒロ『東京うばすて山』

『月刊漫画ガロ』（青林堂、1971〈昭和45〉年3月臨時増刊号）

老いるってどういう気持ちなんだろう？ 老いた人を周囲はどう思うんだろう？

第4章 マンガは現実を模倣する、現実はマンガを模倣する

前章に示した「昭和のマンガ」各編の詳細については次の稿に持ち越すが（理由は「はじめに」に述べた通りである）、①『ミノタウロスの皿』については、講座全体に関わる大きなテーマをはらんだ作品であることから、例外的にここで簡単な説明をしておきたい。

藤子・F・不二雄の手になるこの短編作品は、彼が小学館の学年誌で『ドラえもん』の連載を始める3ヶ月ほど前、同じ小学館の青年誌『ビッグコミック』に発表したものである。作者がライフワークとした一連の「S・F（すこし・ふしぎ）短編」を代表する一編として以前からファンには知られた作品であったが、1990年にアニメ化されたり、1996年に作者が没して以後は様々な版型で復刻がされるなどして（私の手元にも十種近くある）一般にも認知度が高まっていった。2000年には哲学者永井均が『マンガは哲学する』（※14）の中で本作ほか6編の「S・F（すこし・ふしぎ）短編」を取り上げた。このあたりから教育関係者にも気になる作品となっていたのではないかと推測する。

物語のあらすじはこうである。宇宙を航行中の青年が地球によく似た星に不時着する。そこには

地球と同じように文明があり、地球人と極めてよく似た生き物「ウス」もいた。「ウス」の少女ミノアに助けられた彼はほどなく彼女に恋心を抱くようになる。だが彼女は数日後、この星を支配する「ズン類」（地球の牛とよく似た生き物）が催す祝宴で大皿に乗ることに決まっていた。「ウス」はこの星では食べられる側の生き物だったのである。「最高の名誉よ」と誇らしげに言う彼女には彼のどのような言葉も響かない。「ズン類」の有力者を訪ね、残虐な風習をやめるよう言っても、まったく取り合ってもらえない。この場面での彼のモノローグがなかなか悲しい名言である。「言葉は通じるのに話が通じないという……これは奇妙な恐ろしさだった」「ドロ沼を歩き回るようなもどかしさともいうか……」祝宴の日は迫る。追いつめられた彼はついに銃を手に取り……

ここから先に起こった出来事の詳細は授業でも明かさなかった。一気に最後のページまで飛んで、地球から来た迎いのロケット内で、彼が泣きながらステーキをほおぼるコマを紹介して画面の共有を終えた。

「言葉は通じるのに話が通じない」経験がこれまでにあったか、学生に尋ねた。相手は誰であったか、その後どうしたのか、隣り同士で聞き合ってごらんなさいと促した。また、そういう場면을これまでにどこかで見たことがあるか、尋ねた。誰と誰がどこでそういうふうになっていたのか、その後両者はどうなったのか、これも隣り同士で共有するよう促した。

本稿の第2章に書いたことの繰り返しになるが、我々が「他者と関わる現実の社会」で体験したり見聞きしたりする出来事（主にディスコミュニケーションの事例）について、受講生と共に考えていこうというのがこの授業の主旨なのである。本教材『ミノタウロスの皿』は、設定こそSF的であるが、価値観を異にする者同士のどこまでも平行線をたどる会話、「言葉は通じるのに話が通じない」イライラのその先にはもう暴力しかない、という展開は我々の「現実の社会」とまるで同じではないか。そこに受講生が思い至れば、次回第2回以降に読む作品も「現実の社会」に引き寄せて読むことができるだろう。本教材を第1回で用いる理由はここにある。

おわりに

前半1、2章を理論編、後半3、4章を実践編と考えると、理論でだいぶ足踏みをしてなかなか実践に入っていない構成を我ながらもどかしく思う。だが、高校から移って来た私が、大学の履修要項に並ぶ科目名と前の職場で親しんだ科目名との差異の問題をなかなか消化できずにいる様子を長々書いたことは、同じく高校からやって来たばかりの学生たちが陥るという「大1ギャップ」（よく言われる「中1ギャップ」になぞらえて誰かが言った言葉であるらしい）に寄り添う上で無駄ではなかったと思いたい。大学の科目の内容について考えるのに高校の『要領』から文言を多く引いたのも高大接続の観点からの外的外れではないはずだ。令和4年度から運用が始まった新『要領』は、国語科に絞っても歴代のものと大きく枠組みが変わっており、これを受けて大学でも入試や授業の見直しが必要となってくるだろう。このタイミングで自分のような者が双方の目線でものを言うていくことには意味があるように思う。

後半の実践編は次年度これに特化した稿を書くための導入である。本稿を執筆中の今は秋学期のさ中であるが、春学期とは一部教材を差し替えたり、学生の感想や意見の共有方法を見直したり、本講座も各所でマイナーチェンジをおこなっている。学生による授業評価であがった意見も参考にしつつ来年度の春にもまた同様の更新をおこなうだろう。次の稿ではこのような授業改善を経た実践について改めて報告をしようと考えている。

先述したように、マンガの教材化については近年少しずつ研究が進んできており、初等教育から高等教育まで全国に多くの実践家がいる、定期的に成果報告もおこなわれている。もし本学にも実践家がいらっしゃるならば、お声掛けをいただけるとありがたい。

(※注)

- 1 柄谷行人『日本近代文学の起源』(講談社、1980)
- 2 柄谷行人『日本近代文学の起源』(講談社文芸文庫、1988)
- 3 柄谷行人『日本近代文学の起源 原本』(講談社文芸文庫、2009)
- 4 柄谷行人『定本 日本近代文学の起源』(岩波現代文庫、2008)
- 5 文部科学省『高等学校学習指導要領(平成30年告示)解説 国語編』(東洋館出版社、2019)の第2章「国語科の各科目」第1節「現代の国語」1「性格」の項にこうある。「義務教育段階での到達点を引き継ぎ、社会との接点がより近くなる高等学校段階では、論理的思考力、相互に交流する力、情報の適切な判断力といった実社会で求められる言語能力の育成に主眼をおいた国語教育が一層求められている。(段落)「現代の国語」はこのことを踏まえ、実社会における国語による諸活動に必要な資質・能力の育成に主眼を置き、全ての生徒に履修させる共通必修科目として新設した。(以下略)」
- 6 紅野謙介『国語教育の危機』(ちくま新書、2018)や、伊藤氏貴「高校国語から「文学」が消える」(『文藝春秋』、2018年11月号)を発端に、2019年から2020年にかけて新学習指導要領や大学入試改革についての議論が高まった。文芸誌がこぞって特集を組んだ(『すばる』、2019年7月号、『季刊文科』、2019年夏季号、『文学界』、2019年9月号)ことでこの問題が、文科省vs保守派教員から、文科省vs文芸家という図式でも捉えられる機会が増えていったように思う。
- 7 現場からの発信としては、神奈川県立高校の現職教員・笠原美保子氏の著『「現代の国語」はなぜ嫌われるのか』(学而図書、2022)が、この科目の問題点だけでなく可能性についても冷静に分析しており、参考になる。
- 8 文部科学省『高等学校学習指導要領解説 総則編』(東山書房、2009)を参照した。
- 9 5を参照
- 10 文部科学省『高等学校学習指導要領(平成30年告示)解説 国語編』(東洋館出版社、2019)の第2章「国語科の各科目」第1節「現代の国語」2「目標」より引用。
- 11 2017年7月15日、早稲田大学において「教育最前線講演会 学校教育におけるマンガの可能性を探る」(主催：早稲田大学教育総合研究所)が開催され、初等・中等・高等それぞれの教育

現場の実践者らが登壇した。『学校教育におけるマンガの可能性を探る』（学文社、2018）はこれを採録したものである。この日主催者側で登壇した町田守弘氏の編著『「サブカル×国語」で読解力を育む』（岩波書店、2015）、『サブカル国語教育学』（三省堂、2021）にも、マンガを用いた授業実践事例の報告が多数収録されている。また、日本マンガ学会（竹宮恵子会長）の中には「マンガ教育部会」があり、定例の部会が持たれている。

- 12 呉智英『現代マンガの全体像』（情報センター出版局、1986）のち増補され『現代マンガの全体像・増補版』（史輝出版、1990）、のち一部記述が修正され『現代マンガの全体像』（双葉文庫、1997）
- 13 第二部「現代マンガ概史」に示されている。「前史」以降の区分とそこに添えられたキーワードを書き抜くと、第一期（45～58）月刊誌の時代 第二期（59～65）貸本、週刊誌、「漫画讀本」 第三期（66～73）週刊誌、「ガロ」「COM」、実験作 第四期（74～78）ギャグ、少女マンガ、エロ劇画 第五期（79～86）ヤング誌、四コママンガ、沈滞 第六期（86～）情報マンガ、文学への影響 となる。第六期で途絶えているのはこの書の親本の発行年（1986）によるものであろうが、3年後の1989年が改元の年であるから、昭和のマンガ史についてはこの第六期で締めてもよさそうである。
- 14 永井均『マンガは哲学する』（講談社、2000）のち講談社+α文庫（2004）、岩波現代文庫（2009）